01 - 039

保育環境の木質化状況が0-1歳児の遊び 行動に与える影響

浅田 茂裕、吉川 はる奈、七五三木 侑乃、 吉山 怜花

埼玉大学 教育学部

木材は、保温性、保湿性、弾力性、衝撃吸収性などに優れ、 人の感性に深く関わる材料として伝統的に我が国の生活環 境に用いられてきた。最近の研究によって、木材を多用し た木質空間は人の心身の健康や子どもの育ち、学びなどに 好ましい影響を与えることが明らかになりつつあり、木材 利用への関心の高まりとともに、様々な検討が進められる ようになってきた。筆者らは、木質化された室内が子ども の育ちや学びに対する効果を明らかにするために、木質化 された空間における幼児、児童の行動特性に着目して検討 をすすめてきた。本報告では、0-1歳児を対象として、そ の生活圏で最も接触機会の多い床材種と行動特性の関係に ついて検討を試みた。実験は、埼玉県産のスギを使用した 床材(スギ床材)と表面にMDFにオレフィン紙が貼付され た床材(シートフロア)の2種を用い、それぞれ2.5m× 2.5mの木質床を隣接するように設置した。それぞれの床材 上には4種の玩具を同数配置し、子どもに自由にふれられる ようにした。被験者は、A園に在籍するO歳児(月齢8月以 上12月未満)と1歳児(13月以上24月未満)であり、それ ぞれを2群に分け、保育士を同席させて実験フィールド内 に導入した。実験中の行動は、幼児、保育士ともにとくに 行動の制限を設けておらず、自由な行動を観察、映像記録 した。分析にあたっては、幼児の【手指の動作】【姿勢】【保 育士との位置】【他者との接触】などを予備観察をもとに コーディングし、行動分析ソフトウエアによって映像の分 析を行った。実験の結果、【手指の動作】では、2つの床材 での幼児の動作に大きな差は見られないものの、スギ床材の 場合では、より能動的に遊ぶ傾向が見られた。【姿勢】につ いては、いずれの条件でも座位が最も大きく、スギ床材、 シートフロアでの大きな差は見られなかったが、スギ床材で は、姿勢変更がやや活発に行われていた。【保育士の位置】 では、シートフロアでは幼児は保育士と対面位置となる時間 が多く、保育士の存在を確認できる位置、姿勢をとってい ることうかがえた。スギ床材の場合、対面だけでなく、横 向き位置となっている時間が長いことがわかった。【他者と の接触】では、スギ床材では保育士から幼児に触れる頻度が 高く、幼児は自立して遊ぶ時間が多い一方、シートフロアで は幼児から保育士に対して触れる、関わる頻度が高いこと がわかった。

01 - 040

小児科病棟においての母乳育児支援に 対する実態調査

芝崎 麻美、田子 亜希子

千葉市立海浜病院 看護部 小児科病棟

【1)はじめに】

WHO/UNICEFの乳幼児の栄養に関する世界的戦略では、母 乳育児は2年かそれ以上続けるといわれている。しかし、厚 生労働省の平成17年度乳幼児栄養調査によると96%の母親 は母乳で育てたいと思っているが実際生後6ヶ月時の母乳 栄養の割合は34.7%である。A病院小児科の乳幼児の入院は 70%を超え、母乳育児支援を必要としている症例も多く なってきている。そのため、小児科で勤務する看護師の母 乳育児に関する認識や支援について明らかにし、今後の母 乳育児支援を実施していく資料の一助とすることを目的と する。

【2)研究方法】

A病院小児科病棟看護師22名を4~5名のグループにランダ ム形成し、グループインタビューを行った。属性を把握する ため、看護師経験年数と母乳についての学習機会の有無を 調査した。母乳育児支援の実態、母乳育児支援の認識につ いて調査した。尚、グループインタビューでは印象に残って いる内容について想起した発言を支援の実態とした。ICレ コーダーで録音された記録から逐語録を作成し、その中で母 乳育児支援と思われる内容を整理し、集計した。倫理的配 慮として文章、口頭で説明し同意を得た。

【3) 結果】

1. 看護師経験年数は1~4年の看護師が約半数を占めてい た。2. 約7割の看護師は何らかの形で母乳について学習機会 をもっていたが、専門的な知識を得ている看護師はその内 の2割だった。3. 専門的な知識がない看護師は他の看護師に 相談して解決したり直接の支援に至らなかったりした。一 方、専門的な知識を得ている看護師は自ら支援を行ってい た。4. 母乳育児支援への認識として「病棟全体で支援を統 一することへの期待」「看護師が積極的に行う役割とは捉え られていない現状」「母乳育児支援の経験がないため他の看 護師に頼りたいという思い」「専門的な知識や技能を提供し たいという意欲」「今まで着目してこなかったことへの気づ き」「母親のライフスタイルによるため、看護師が介入する ことの疑問」「これまでの母乳育児が継続できるようサポー トすること」「3~4歳の子がおっぱいに執着することへの疑 問」の8つのカテゴリーが抽出された。4) 考察母乳育児支 援に関する認識にはばらつきがあり、専門的な知識の有無 が支援のきっかけや内容に影響することがわかった。母乳 育児を支援することは小児に携わる医療者として当たり前 になるのが理想といわれており、小児科領域においても支 援を行っていくことが重要である。